よつて為持

きのふまでたのみし思ひて人にまかせのね神やしるらん哉

承安二年十月十七日加判之如今馳筆不能沈思後見定有恥仍恐詠畫也

# 三井寺新羅社歌合 承安三年八月十五夜

題

遠見山花　尋古郷郭公　潮上月　野宿雪

詠合友戀

作者

左

中納言君 法性寺石蔵 法橋房

阿闍梨蓮忠 三乃 聖護院住

阿闍梨證算 丹後守 為盛息

肥後君明智

右

少輔君 三井寺南院執行 房住 敎智律師房

阿闍梨泰覺 泰尋法橋息

阿闍梨親實 大臣伊實息

大進君智運

散人君賢辰　讃岐君観宗
常陸公道禅　出羽公長暎
帥君信親　少将君智経 後忠息
佐君良敏　淡路君忠勝
講師
佐公良敏
讀師
散人公賢辰
判者
從三位行皇太后宮大夫俊成卿

一番　遥見山花
左 勝　中納言君
よしの山すゑのこすゑをけふみれは雲ハさくらのよそめなりけり
右　少輔君
みよしのゝ水わたる山のたきつねよりこえし波や花のしらなみ
左歌すゑのこゝ心得よろしかり侍れ猶すゝ波やとも
も各別なるへしやしにおもしろくも右歌こゝろわけらの也
またくこゝろにとらぬ波のたちのおもふてあのしおなる紙まへ
花の数かたへしいつゝや波いくかたへき侍れた
れ事のことよろしくはなんよりあるまし勝とすへし

二番

左　　阿闍梨蓮忠

たれか又春にしられぬ山にてもありぬへきかたちりて袖そめ

右　勝　　阿闍梨泰覚

志ら雪ふりしくつふえゆかしさうていつくの花のさかりかぬ桜

左哥さ梅おほくは春毎句千払ふたしらふことそや

兵こゝし不足なりんされらあらねかなとそ婦らくと

詠るかし右のいつくらくなのさくあさかん也いとふ

たかくいとおのしちぬらみさらくもなくあらむかの

白毫の光の前八千世界をてら志てんそらしてる

うふさ右古為勝

三番

左　持　　阿闍梨詮兼

おく山遊ひはちるにほやゝ花よはぬのさかにあはれしのふ

右　　阿闍梨親実

ものの思ふや伏見の里ふ弱よあてとふつせ山の花をこそかな

たゝおなしこゝろをよむを詠てある志うくおもしまか我あらね

志のゝとむもてくせるふほとも志し浅いてなさき

やゝよ待れん右哥のの後撰集ふあらんのくれを自ん

こゝせそといふ哥をとりさくそこせらみふやあん

ちらくあれ中ちつころ歌あるをみもかゞやくなれ
歌作しふやの方のこ滴さかく事ふかく人をも作之
為持

四番

左　持　　明智

雲のかゝるちの高根の桜をなほ花のぬをわか逢さらん

右　　智暹

まてしま花やさきんよし此山水に於けるぬやつのうれ雲

左のさく体のぬといひ右のまてくときと云ふ風体

已華雲空忽同みよりて為持

五番

左　持　　覚辰

春の世ふかつちかぬしきて花かりても雪ぬ嶺の志ら雪

右　　観宗

たくひなき白のあれたよ似みんよこを江つんやまの山桜か

左も春風且零落峯雲不懸遠とらつれんにと

なるふ峯春乗てちのこゝろおりるそ花白無比

顔雲色猶相混とらつる心をおのしなきとらんまの哉

いよこよいむらしたゝ成やあらむ左右雖有得失

勝負已不分明なるをよろしかるへし

六番

左　　道禅

くもり野のふしよのまに信夫山峰にわかるゝやへの白雲

右　勝　　長延

棒そゝる松ふかん声てまちていつ代の山桜さくらしなちるを

左のしたまの句ことを法なしいはよろしくそきこえ侍るを上よみよしのと讀よ下にあるとつくふ句共ハしめ文字用ちて旧き合にもめとものあたることなる本右歌道のやうをもさへてよまれける歌落るところもあまよろしちち道中あつたらとさてよいふさこの次なりとはなふゑつゐしもよこことろみたあるねと中よりこえまされるふ似ましわ左歌も尤なり此ハ左ハ少れ末あるによりて以右為勝

七番

左　勝　　信親

峯にふれしき水をひかん御山さくら白き花とく風なき日

右　　智經

あらはされぬる金ハ立かゝる雲ハたる桜のさくら面影

この番あまりきたなふうてはつくらしく侍るハ左弐を哉左のうたは花をもしふとにへみかの末ある也へハし哉

これこそみやまの奥りきられてかほりまさらん
もちたれの勝とや申へし

八番

左　　良敏

よそにみてはなのあとをやたつね山桜ちるさくらの花のおちりまかふ

右　勝　　忠勝

咲まさるかたのふもとの山の桜されおなし枝かきりぬれぬ衣

左歌よろしきやうにきこえはへるを右は聞えてまさるのみ

こそおほつかなけれそれをこそやさしきあはれなるかけ

ちりとおもひし末まもりとのみかたちて峰のちら

ふもとは雲のうへになれしたつのかの山もとにたつた

はなちるやよみては右勝

一番　故郷郭公

左　持　　中納言君

なかめてはあはれとよりも時鳥なをたつの宮に鳴

右　　少輔公

故さとのみかきの原のほとゝきす人めかれしもまつにしられて

左歌頗存古風近代入幽玄但郭公高聲誹非其歳

哉右歌のふるきのやうにもきこゆれとかの石上

ふるきみやこのほとゝきすなくなるこそまことに[illegible]

によりてやはらむ但是はみのくにしもとさして背に
あらそひてよめるは幸に麦秀上手にかなはんと侍るを
されども古きことを奏におもひ此のことも中かたし持
なるべし

二番

左 持　蓮忠

東路におもひこそやれみなくるしき人のもとへあしびきの

右　泰覚

いにしへを思ひいでてやむかしさく宮にやすくらん
はつかひとしにゆきてそ待ち君をわれさへ我をかな

これかの箕子之作麦秀詩周大夫之咸黍離章
とおなしこゝろなれば高津の宮の古きをおもひいでゝやむかし
いまではたゞおもひなすべしいづれもわかちかたくあ
をよびがたきこと西よりてまさ持とした

三番

左　讃兼

こゝろの花はいつまでもたのまぬ旅のそらかな

右 勝　親寛

なにとなくこゝろよはく時鳥なきつるかたを人はいさよ
左のうたかく聞ゆれどもなほかれとかへしてむかしふな

左歌はさもあるへしかるに振るも似るかなきよし申し
歌あさもの持ちを様あまりかへるにやあるらむ左方
はいひたてさくとおほえて惜るへき里と人はいひ立と
いふことはなをおりたての勝とすへし

四番

左 持　明智

ゆくまくむ花さくをやかのよ河るあかれいつこよ様はあくなき

右　智遷

あれ果るたゝの橋の富れて親なるおやのこともかなしとやあまく

左右両首心同詞優也但不要細故為持之

五番

左 勝　興良

はるゝあはれ人はうつゝにし忘れとも志るかゝらなくはゆきしつゝ家

右　親宗

はちすのはよにほひて富貴をまとも花やおもひいつる藤

左歌のさまも優にきこゆるにつけるやうにも見えたるにいひしせたれ人は
おのしくたん也但古今和歌の五七句をとるのまねを
かへつとや歌あさもの心よいはすと思唯あるへく侍ら
む右方歌をとおもふてれはあれこときこゆなれちや也あ
らんあはれのかすはもいて様たの勝とやすへき人

六番

左　勝　　　　　　　　道禅

なさとの宿ならはまよ時雨むのしきしのよまて庵の秋を

右　　　　　　　　　　長延

くむ人もなき古里におちる清水と古の一声成やまくら

二その庭もまた古本にかれとしの雲み人もの見まち

おりしくいつゝはゆふれたるものかちちる里に来れ

小白く人をもてはやまての文左為勝

七番

左　勝　　　　　　　　信親

かくかれ里のうれしすにあらぬ夜山風ゆるるて婦りせぬ

右　　　　　　　　　　智經

あれふりし宿の樋の雨垂落ちて溜しと名をえけらん

左歌御里於已変山鳥翅獨新とふるしくれ寸の

左いひきれ四右歌やとりのことも来ぬなといつかはぬ

しきもと名をあしりしてやかとそもちをえ四をふたのか

ちかれし

八番

左　勝　　　　　　　　良敏

あし人もなお庵の雨をきゝし春れとかこちそ声にあらん

右　　　　忠勝

あれ果し人もすさめぬ友ゝふきれるかたちほとゝきすの
左右の歌ともよろしとかたらよくへく人ちておかれ
しかは判者ことに判詞のひかりハ滴されるまし
ふへしかるへしいくさの勝負かゝれるとなれハ
いふ人あらねハいふことかの法花の普門品文
みや天見人く見天く称すると人天交接両得相
見とのひ法もといはなそこし給へたくまさに西方
判詞もさそしきよをなかりぬまことに勝負いふへく
正のかたに侍らく仍左の勝とす

一番　湖上月

左　勝　　　　中納言君

秋もなほしかの浦わに月さえは水も波よらぬ氷しけりけり

右　　　　少輔公

見わたせはなへてしけるかゝある水海りうつしても澄める秋の月かな

左歌ことはなにかなく優なる姿なり右歌さしてもなかめ
なるやうなことまれ句いひとほりおしはかると見えともなかる
とあるれといつれも同にてもなしや歌合の時の歌
にはひさしと心の人侍らむ左の勝たるへし

二番

二番

左　持　　　　　　　　　蓮忠

月さゆる志かの浦人沖とほく舟にもたく袖そぬれぬる

右　　　　　　　　　　　泰覚

志かの海よせくる汐風月の光をかきわけてゆる氷とそ見る

左右志かのうらに釣漁の舟をいそく名にしほれ海
みかきわけらぬさそかさしたのしふんとそ見え
りなれと歌の志まおもはれ持とさため侍る

三番

左　持　　　　　　　　　歌兼

はかなくや志かのしからみふく風に寒さまさる有明もけしとみかり

右　　　　　　　　　　　親寅

月影のあかるの浦にかゝれともおもはぬ流をこそおもへ
たゝおもひをよそにしくらへのかせ風てさしとふる花
おもて風をふきてのならひやあはれにかゝる心の様
おもひのふ名におもふこそ葉おもしくいきてゆらくとて
遍あはれにこそいふやらむ尚まさるしもとをこそ
みや

四番

左　持　　　　　　　　　明智

秋のよは今宵のひとりうちなれた月とはてぬさやうき思ひあり

右　　　　智暹

おもはぬにしかの浦よりいてや波ちかゝるかみて夜月のさ
たなはにもふ深くなかしくてまこゑ待絶た浪くぬかち
らなくはつふ月をともさ西をおいそ海ちしき浦まにと
をちこちとふさむかしぬんなるて名も波ちはるふ
かなとのへふ深かいよそしまつを押も浪しも我よしむこ
とやいうかの藍葦君か浦にかゑりしたまもひろはく
をともまうおもし次

五番

左　　　　賀辰

人の海ふたにかみの浦の名て波ちもはやよ思ふも月の九

右　　　　鋭字

唐さまや志賀の浦にる月をあいそねのたしたまふ沖の釣舟
はあそこにかくみおかしく持えし侍ま古風狂称敬賞
いひつそこん名をてもかくいはむてたふさ海邦
うら新か級の浦まくよか桃をきまるにしまてしむ佐て左
無待しめとしてるやさ待しくて棹歌一曲釣漁翁よし
いふふ沈の名とおかそえてんほそくおこそ太そいさう
いかよけうと待しむ

六番

左 持　　道禅

唐さきのやえつる波やあしの上にかつてさゆる秋のよの月

右　　長照

月清き汀の波はよせなから氷になる志かの浦にさへ侘し

たえつるとのなこしの歌といつれもしたひ給ふよしまつる

歌ありつゝ右よりも事はなかれともこゝろありてまさり

けなくもてふまの句もよろしくきこえよろしくなる

やよろしく持と哉

七番

左 勝　　信親

おほろにもさつもあふ湖のなかはよりわく月見てにけり

右　　智鏡

さゝ波やひかれる秋の月をみて志賀の沖にも空も清しや

波たちかへるとかくふかは深めんいへとも但月にいて侍

やはらむつかしくそうすへきあれはまさりも湖もかゝみて

志かまんてやなかの志の川の秋は月をしけく成ける

比らの高根やなかめて浮るかゝるむねか秋かな

又とおもふおもも空もれさしぬかしなえもまさるといへは

猶左の歌もつよくうるはしまさりもよりは勝に侍る

八番

八 左 持 言敏

いほりもる夜半の月をおとつれぬるゝ限りゆる志かのね幸(?)ゝ

右 忠勝

かゝるやも月秋やとひあかつきのよそにもなかれてへふかれまさ

左はゝ限りよれふなかくは常ふまさくなれらこと秋まさと

月もこゝ庵りありといふ深山の庵ふ侍るめまし右月秋

やと次きといへるまそめあさらしまさりかれゆくところ

もあらぬのといへるまゐのるはまさまさりしきをはつらね

ふ猶持なるへし

一番 野宿雪

左 持 中納言君

空はよるのかつらを結ぶ野の月よ秋もまた秋の旅ねを結ぶ野よ

右 少輔公

吹く風も雲ふきはらふ夜半のむしろさえおもなかくしく床はさびしくれ

左歌あかつきのおもひ旅寝の秋のあはれことよりなしされてえん

そまさに月右おもかへしとかきしきこゆむ旅のいふ床

はえたりふ雲ふかきとなしはえやふらぬまさ月まさ

歌さ月はこれもいよなるふへし持ときかし

二番

左 持 遠忠

真葛はふいなの原やとれと嵐吹さけ雪も霜の下に

右　　　　　　　　　泰覚

あさ川の水に真葛おりかへる岸まてわつらふ秋の霜律しく

左右のよしさもいつれも宮城のあさる比不名　下欠

三番

左　勝　　　　　　　諦兼

霊峯の上枯の野をくれは比なるにはあはれなりけり

右　　　　　　　　　親康

かちをめて思ひのつれさまの岸に沙まてもよき法ものはぬるに

左のこれは野の萩にあされもしけるにかくてそくおなしゆ

右の哥も殊なるにはあらねと猶ニ人待人のちよもれはにて

ておく浮く待ちにかけてかんく八分さ海いおかしかれてり

但霊法むとも野そ蘆の萩をとさく法まなんこそ

いつれも枯野の野をさせれ烟いかなれとあはさ法

くまて不分かれとかまゑし

四番

左　　　　　　　　　明智

いつれはれを野への霜さへ霜待ちいつまれきうへま花咲に

右　勝　　　　　　　智暹

さえてしも降にたかき踏こえてけ人まとすまて野おされ萩立

両首の風体皆為同科左のうたまさる此言の葉にて
なくやあらむ右は旅宿の流類野路逢々行人も
あはれによむ旨の歌なるべし

五番 左 持 賢辰

かはづなく井手のやまぶき流れていはぬにかはづなくらむ

右 親家

山おろしにのきのさくら吹おろしてねさめがちなる春の下伏

左右のうた優なるも庭にかはづらつらとよみなしてよき歌の
心はまさらぬねこそあさねてまさるべきかなしといふ事

至極してもおちこちの名上の句比ぶれ右はひとつなるの
こゝち出来るむ猶をあかちあつかふも申事ふやゆるされて
かつてこれ傳へぬ但露れほど持とぞ見えたり

六番 左 道禅

いとゞ立つ旅の床の枕にも露深しの袖

右 勝 長熙

あはれのみやがて秋しき旅の空ふみにしく涙さへそて古路ふるの

左歌いとさむしたひの床に寒き春立のそらしは
流石といへるふかくしとはいふ出て枕にさそる

やまみちにひとりはゆくは野原のつゆよりもなくやたびぢ
ゆくさきはふかくてといへるはかなきゆくへやあはれなるから
を但尚右まさるへしハ勝つへし

七番

左 持　　　信親

おもひやる雲ぢハさきをあはれとさしてゆきかへるの旅ねハ

右　　　智経

あきみ袖のうへにかわく露ハ語ひつれ思ひぬよりの雲ぢハかよ

左右為躰共様甚花頗忘真実歟雲のうへハさ雲
のよハつまとまさるまさる似仍可為持矣

八番

左 勝　　　良敏

庭にて暁のをりやの跡をあらしこそむすびにしさびしかれ
あはれなる

右　　　忠勝

ぬるゆめのよに我にもさめんせよ涙ちるふき拂ふ野路のいからきを
けつらし其すこしも行く草のなしいつよ待ぬ風よ出て

於左いまんこしよろしく左可為勝とや　一

一番　歌合　友意

左　　　中納言公

おもひしとゆきちるの妹かつれども君かへすかへえ行つらむね

右　勝　　少輔公

しらあしのつとそぬ井といふいなのゝそにおろ絶しさ流をとさらとる

左歌ことかなりはあはれとも忘させるかとろなし右

歌はおろかしおや何ゆへにやこゝゆ作は何よしの處

たそぬあひと云ふところんよせあらさて人由右勝る

へし

二番

左　持　　蓮忠

みをつめをけるさらやしや田子をとて流をるらむとちるかるゝなれ

右　　泰覚

君か吾人に隠し技かるうちにいわおみの跡をもてれぬるかな

左右共首同科無差別依為持

三番

左　　證意

悉ゆくよかゝるあひそ君ちる人のこゝ絶く契おもしらぬ

右　勝　　親寛

あなたの年のかくさえと君しなほくかなさのたへ絶の契を逢ひ

左歌以及諸人之風躰比為廣猶之義欲立

の歌此常のなしいよあはれやあはむ依之圖之躰

詫焼仏懐其理可然仍以右為勝

四番

左持　　　　　　明智

なくはしらかゝる形のうきよまし恋ハつらそね中〃なかなか君ハ　ヒハ

右　　　　　　智暹

味つらくいひてなくさむ人もなき人いかにしてうきをうきとしらん

左なしといふとも両首ある右歌如雅なりとて一左

さらにかくることかゝるや我持するへし

五番

左持　　　　　　暁辰

いかに指とこそはいふ人にかゝる下恋の涙によしの池よりおもふ哉

右　　　　　　親宗

思ひやるあまりこゝにも恋川のふかき君にあひそめ初瀬そ

左恋の我か病のおもひやるあはれあひそめぬにあはれ

これいつれともこゝろにおよはあらん持とす

六番

左持　　　　　　道禅

君恋の山のかけもあらぬ人のさき君のこゝろにいはぬやなにゝなる

右　　　　　　長照

思ひそめ行くからも今さらかひありて君か為にへたて恋路を(上)

両首の恋勝負又不分明なりのミハ恋のこたよ君

ちよむこころの人にむかひて人におくるまじきよむかる
通し他人に讃ぬる附君字顔荒涼なるにや覚ゆ
判又持なり

七番

左　　　　信親

おもひきたのむ中よりかれたあふまゝよそをいはちなあめ

右　勝　　　　智經

君なくて依ふかいさんれよもこゝろうきもたゝきさもある人々ふ
左依為哭中沈讃路以可過路不指としへ人にぬおに
くるこゝ右称昔友為君以意主謂吾妹ころ



又のひとつて先に他右の末句の友則本主とせられ
後筆なるにおよぶやかくて勝なるへし

八番

左　勝　　　　良敏

あひ見ぬは家とこえいで久来しにふおもぬつしと文かうせよ

右　　　　忠勝

おほかたをいひなくさむ吉人ありへいるまてはいきれなれ侍れ
左おれまうかたの友たんかくしいさん顔のこころあて
かやうふくそへてしおのしくおもこ右くわるもとの歌ぞ
なくれとも又させるふるふもちよふしうよりて　以左

勝ちん

和哥の浦の波ふくもても年へぬる人ハ志るへよおれゆくすゑ

判者家

先日所給預之歌合如形加判詞不進説也自来
雖有種々病痰且雖肖君命且依恐神慮相扶講
功〻也於近来味諸好道家處多以蜂起然而自
陳更不驚思給之処於今度歌合者殊感思不少
者也三蜜瑜伽之壇倚暫詠柿下之風一乗止観
之窓於遥尋湖上之月即参詣新羅社之廣前各
論誦豈之葦原之舊跡以更為分紕謬被召取

愚判一為恐一為悦者歟以拂舟之虚名及末徒
之高聞已可為今生名誉後世資粮也但旦判之
難完不叶衆人作氣此条獅畏中之由可然之様
可令披露給候也頓首敬白

十一月五日　皇太后宮大夫俊成

謹上　石蔵法橋御房

右大臣家歌合 安元々年十月十日

題

落葉　初雪　暁恋

歌人

左　　　　右

大貳卿　　頼政朝臣

女房丹後 頼行女　　寂念法師 為業入道

季経朝臣　　頼輔朝臣

女房 皇嘉門院別当局　　小侍従

経家朝臣　　行頼